

論文紹介

Affiliated Participation in Open Source Communities

企業のOSSコミュニティへの参加

著者

Adam Alami, Andrzej Wasowski

Computer Science
IT University of Copenhagen

論文情報：2019 ACM/IEEE International Symposium
on Empirical Software Engineering and Measurement (ESEM)

紹介者：堀口 日向

1. 背景，目的

背景

- ・ 商業的なプロダクトへのOSS採用
- ・ OSSコミュニティとの関わり



どのように採用すれば，コミュニティと関われば，利益につながる？

目的

OSSの採用や，コミュニティへの参加を検討している企業に，参加を最大限有益なものにするための知見を提供

- ・ RQ1. 企業はどのようにOSSコミュニティへ参加するのか
- ・ RQ2. 企業のエンジニアがOSSに貢献する際の障壁は何か

2. アプローチ詳細

調査方法

半構造化インタビューによる質的調査

対象コミュニティ

Linux, ROS (Robot Operating System)
商用利用されやすく，企業からの開発者が多い



ROS

対象者

コミュニティイベントでの募集や，LinkedInでの検索

対象人数：21人

- ・企業に所属するエンジニア
- ・Linux, ROSを主要プロダクトに利用

3. 企業のコミュニティへの参加モデル（1/3）

RQ1. 企業はどのようにOSSコミュニティへ参加するのか

3つの参加モデルがあることを発見

1. 受動的な参加

ソフトウェアやコミュニティを利用はするが、貢献はしない
貢献することに対して、それに見合った利益を得ることが
できないと判断された場合

3. 企業のコミュニティへの参加モデル（2/3）

RQ1. 企業はどのようにOSSコミュニティへ参加するのか

3つの参加モデルがあることを発見

2. 潜在的な参加

限定的な貢献を行う

- ・ 公開しても利益が保証されるビジネスモデル
- ・ 内部投資が回収できた
- ・ 少ない利益しか生まない資産

ただし、競合他社との差別化のための機能は公開しない
利益を確保しつつ、オープンイノベーションのメリットを
享受

3. 企業のコミュニティへの参加モデル（3/3）

RQ1. 企業はどのようにOSSコミュニティへ参加するのか

3つの参加モデルがあることを発見

3. 能動的な参加

バグ修正や新機能を提供するなどの貢献を積極的に行う

- ・ 企業の利益がコミュニティの成功に依存
- ・ オープンイノベーションを利用し，開発コスト削減や，開発時間短縮を狙う

4. 企業のコミュニティへの参加障壁（1/3）

RQ2. 企業のエンジニアがOSSに貢献する際の障壁は何か

参加モデルごとに異なる計6つ障壁を発見

1. 管理職の反対

管理職に，コミュニティへ貢献するメリットが理解されない

2. 企業イメージ

企業の名前を使って貢献するため，貢献内容によっては逆にイメージ低下につながる

影響のある参加モデル： **受動的な参加**

4. 企業のコミュニティへの参加障壁（2/3）

RQ2. 企業のエンジニアがOSSに貢献する際の障壁は何か

参加モデルごとに異なる計6つ障壁を発見

3. 知的財産の保護

独自のコードやアーキテクチャの漏洩を懸念

4. 貢献へのプロセスや方針

コミュニティに合わせて企業内部での開発プロセスを調整していない

影響のある参加モデル：

受動的な参加

潜在的な参加

4. 企業のコミュニティへの参加障壁 (3/3)

RQ2. 企業のエンジニアがOSSに貢献する際の障壁は何か

参加モデルごとに異なる計6つ障壁を発見

5. 参加へのコスト

ドキュメントの作成, リジェクトされる可能性への理解,
コミュニティメンバーとの交渉が必要

6. OSSコミュニティに不慣れ

OSSコミュニティの文化やプロセスに慣れていない

影響のある参加モデル:

潜在的な参加

能動的な参加

5. まとめ，所感

質的調査で分かったこと

- ・企業のOSS参加には3つのモデル
- ・参加モデルごとに異なる参加障壁

これらの調査結果は，
企業のビジネスモデルや経営戦略に合わせて，
どの参加モデルを選択するか検討するために利用できる

所感

具体的にどういうビジネスモデルなら，
コミュニティの活性化と自社の利益の双方につながるのか